美しい犯罪

サト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美しい犯罪

【Ｎコード】
Ｎ５６２０Ｙ

【作者名】
サト

【あらすじ】
家族崩壊寸前の家の息子を誘拐する？
身代金０、意図の分からない指示・・・
そして、全てを否定するラスト・・・。
貴方は分かるだろうか。

この『史上最高に美しい犯罪』に隠された本当の意思と意図を。

プロローグ

美しい犯罪とは何だろうか。

まず一つに、人を傷つけない事。
人を殺すなど論外である。

正しい犯罪とは何だろうか。

悪の為に犯罪を行わない事だ。
金目的、復讐目的など、鼻糞(はなくそ)を噛んだティッシュと一緒にゴミ箱へ捨てるのと同じ位、無価値な事である。

完全犯罪とは何だろうか。

警察が如何(いか)に無能か、役に立たないかを世間に知らせる事だ。
決して、殺人など人を傷つける様な事な事をしてはいけないという事だ。

美しい犯罪。
正しい犯罪。
完全犯罪。

『正義』という名に隠された悪の『影』

犯罪。

貴方はどう思うだろうか。

この、史上最大に厄介で史上最強に美しい犯罪を。

プロローグ（後書き）

始まりました。
誤字脱字のないように、がんばります。
宜しくお願いします。

プロローグ　1　久龍　実

小さなマンションの一室。

安いマンションなのか、畳部屋と手洗い場と風呂しかない小さな部屋は、何かの大量な数の資料によって、小さい部屋をより、小さく感じさせた。

しっかり閉まらない窓から、時折、隙間風が吹いて室内の温度を下げていた。

そんな中、小さなちゃぶ台の様な机に向かって只管（ひたすら）にペンを動かしている男がいた。

年齢は二十代前半。顔にはどこか幼さが残っていた。軽く染めた栗色の髪が、筆を動かすスピードを変える度に小さく揺れた。

「・・・ねぇ、龍（りゅう）のお兄ちゃん。」

男の横に居た、中学生程の小柄な少年が男の肩を軽くたたいた。男はそれでも筆の動きを緩める気配も無く短く「ん？」と聞き返した。それが面白くなった様に少年は唇を尖らせた後、

「ねぇってばぁ～。」

さっきより大きな声で、肩を強めに叩いた。男は筆を止めて大きく溜息をつき、見えない何かに前から押された様にして仰向けにして倒れた。

その姿勢のまま、男はゆっくりと焦点を少年に定める。

男の眼に映ったのは、不満そうな顔の少年。

そんな少年を見て、訳も無く大きく溜息をついた男は、呆れ半分に

「・・・何？春君。」

とぶっきら棒に聞いた。

もし、彼らの事を知らない第三者から見れば、お互いの物言いから彼らを兄弟だろう、と推測するだろう。

しかし、彼らは兄弟ではない。

まして、血縁関係すらなかった。

春君と呼ばれた少年・・・もとい、結城 春と男・・・もとい、久龍 実は親同士が仲が良いという理由で、昔から親しくしていただけの間柄だった。

しかし、結城の家でゴタゴタが起きた為、一時的に結城だけ久龍の家（といっても、すでに久龍の両親は他界していて、結局は久龍が借りている安いマンションだったが）に来るなったのだ。

結城は、男の方に右手を差し出した。

寝転がっている久龍が起きるのを手伝ってくれる為に出した手だ、というのに気付くのに久龍は数秒かかったが、理解するや否や久龍は結城の手を借りずに自分で起き上がった。

結城の手は何も触れずに、持ち主の元へと戻る。
結城は大きく溜息をつくと、久龍の目の前に来るように自分の立ち位置をずらして、しゃがみこみ
「龍のお兄ちゃん。僕、腹減った。何か作って。」
子供じみた笑顔を浮かべながら、ねだる様にして結城が言った。久龍は結城の顔を見ると溜息をついて、顔を背けたいのか視線をずらした。
「・・・龍、じゃなくて、久龍な。」
と前置きしてから久龍は、ゆっくりと片手を上げて結城の後方を差した。
それにつられる様にして、結城の視線が動く。
散らかった部屋の隅に置いてある、近くのコンビニで買ったばかりの食材（といってもカップラーメンやカップうどんというものばかりだったが）を指差してぶっきら棒に
「その辺に買いだめしておいたカップ麺が有るから、勝手に食っていいよ。」
と言った。結城は、口を尖らせて呟く様に
「また、カップ麺シリーズかよ・・・。」

とぼやいた。

その口調とゴミ箱に大量に捨てられているカップ麺やコンビニ弁当の空き箱から、何日もろくな食事をとっていない事が悟られる。

結城の出した声は、小さなものだったが、近くにいた久龍には充分聞こえる声だった。

久龍が低い声で「文句が有るなら、食べなくていいけど？」と短く言う。

結城は小さく溜息をついて舌打ちをすると、部屋の隅に移動し、ビニール袋の中身をあさり始めた。

そんな風景を久龍は横目で見ていたが、何を思ったか、ふと机の脇に置いてある携帯電話を手に取り、開く。

すぐにアドレス帳を開いて、それぞれの名前を懐かしそうに見た後、通話ボタンを押した。

プロローグ　1　久龍　実（後書き）

主人公は、春君と久龍の予定です。
彼のかける電話から、始まる予定です。
多分。

プロローグ　2　山下　桐

「先に失礼しますね、山下さん。」

大きなオフィスの小さな出入り口から、若い社員が顔を出しながら言う。

その口調からは、尊敬の文字が見えた。

山下、と呼ばれたパソコンに向かっていた男は首だけを社員に向けて片手を上げ、「お疲れ。」とぶっきら棒に言い、再びパソコンに視線を戻し、キーボードを叩く手を速めた。

年齢は二十代前半。皺（しわ）一つない、真黒な高級そうなスーツに身をまとい、縁なしの眼鏡を掛けたその外見からは、いかにも『仕事が出来そうな上司』というかんじだった。

彼の働いている所は残業代が出ないからか、いつも十一時を回ると、仕事をしているのは彼だけになる

規則的で休む事を知らない彼の手が叩くキーボードの音が、大きなオフィスに響く。

ふとキーボードを叩く音が止み、山下はきちんと整理整頓した彼の机の脇に有る、小さな時計に視線をずらす。

１１時少し過ぎ。

少し早いが、今日は終わりにしようと思い、彼は鞄を手に取り席を立とうとした。

そんな時、鞄の中から奇妙な音・・・もとい、携帯電話のバイブ昨機能が電話を着た事を伝えた。

山下は一回舌打ちをすると、一度座りなおして鞄の中に手を入れる。

発信者を見ると、『久龍』と言う文字。

その文字に対して、大きく溜息をもらし、彼は通話ボタンを押した。

プロローグ　3　九十九　猫実

「本当にココなんですか。九十九(つくも)さん・・・。」

一人の女性が小さな公園内の草むらをかき分けながら呆れ声で男に聞いた。

九十九(つくも)、と呼ばれた２０代前半の男。ソコソコのイケメンだったが、だらしなく着た真黒なスーツに寝癖がついたままの真黒な髪、ずり落ちそうな眼鏡をかけた、その外見からは『男友達のままで終わるタイプ』だった。

「えーと？多分有ると思うんですよね～。証拠物件。」

九十九がのんびりと答える。そののんびりさに、女は「多分ってなんだよ・・・。」と呟いた。女の声は小さく、九十九とは随分と距離が有った為に九十九にはその呟きが聞こえないと思ったが、誤魔化す様に九十九は笑った。

「もしダメならいいですよ、手伝わなくても。俺の勝手にしますから～。如月(きさらぎ)ちゃんは警察庁に戻った方が、有力な情報が得られるかもしれませんからね～。」

九十九が草をかき分けながら言った。それには皮肉めいたものはなく、本心でそう思っている事を伝えている様な口調だった。女・・・もとい、如月はは、一度ふくれると、無言で草をかき分け始めた。

そんな動作を見て、九十九は小さく笑い草むらに手を突っ込んだ。そして、次の日には筋肉痛になるだろうな、とのんびりと考えてい

ると手に何か当たり、手に痛みが走った。

それを気を付けながら取り上げる。

蛍光灯の方へ向けてみると、鋭く、怪しく光る刃。それに自分の血と僅かについている誰かの血。

「・・・証拠物件、発見。」

ニヤリとそう言いながら、如月に声をかけようとするとポケットを何かが揺らした。九十九は右手でそれをとろうとするが、手を切った事を思い出し、手を回して左手で携帯を取った。

発信者は『久龍』。

その発信者名を懐かしそうに見ると、九十九は通話ボタンを押した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5620y/

美しい犯罪

2011年12月2日01時54分発行